

## 渡邊倬郎氏の書評に答えて

2019, 8, 24 愛知教育大学哲学会での発表原稿（転載）

久田健吉（昭和41年3月卒業）

この原稿は、タイトルの通り、渡邊氏が2018年の『哲学と教育』（66号）に発表した「カント〈三批判書〉は何を論証しようとしたのか—久田健吉著『ドイツ観念論物語—カントとヘーゲルの哲学—』書評」に答えたものです。

しかし、この論は本誌に載せるために書いたのではなく、2019, 8, 24の愛知教育大学哲学会で、渡邊氏の私への書評に答えてほしいという愛教大哲学会事務局からの要請で、発表原稿として書いたものです。それゆえ本誌に転載する気はなかったのですが、渡邊氏の書評が私の執筆意図とは著しくかけ離れていて、私にとってこの書評が定着しては誠に不本意となります。敢て転載を決意したという次第です。

転載にあたっては、発表の場合にはできる「中断しての説明」はできませんので、説明の部分を加えることをしました。それゆえ、少しの変更はあります。しかし大幅な変更、もしくは趣旨を変えるような変更はないと申し上げます。

そして、読者諸氏には、この論のみならず、私の著書を手にして読んでいただきたいと申し述べておきます。この本は私の自信作です。なのに、渡邊氏の書評には想定すらできないことが書かれています。誠に残念。その確認のためにも是非！。

私の本は、

『ドイツ観念論物語—カントとヘーゲルの哲学—』（2017/9/15、ほっとブックス新栄）です。

\*読者のみなさんへ

この論の「批評」の語について。カントの三批判書にはすべて「批判」の語がつけられています。これとの混同を避けるために、私は「批評」の語を使用しました。「批判」と同語と考えて読んで下さい。

### 渡邊倬郎氏の論文

カント「三批判書」は何を論証しようとしたのか  
—久田健吉著『ドイツ観念論物語—カントとヘーゲルの哲学—』書評—  
に答えて

<はじめに>の項

氏の批評の中心点は、私のカント論が「ヘーゲルから見たカント論」になっているゆえ、間違っているというものです。カントの批判哲学の「批判」は、ギリシャ語のクリノーに

由来し、分けること、峻別することを根本的特質とし、分かるものと分からないものに分けたのがカント哲学の真価と言います。

氏の「批判」の理解について。カントは分けることだけを究極的目標としたのではありません。総合判断のために分けることをしたと反論しておきます。カントは『純粋理性批判』の目標は、「どのようにしたらアприオリな総合判断は可能となるか」と言っています。

#### <純粋理性批判>の項①

「アприオリ」について。氏は、私のアприオリの訳語をめぐっての説明に、カントはアприオリに「生まれつき」とか「誕生とともに」とかの意味を持たせてははず、認識の経験からの独立性を言うためにアприオリの語を使ったと批評します。

カントは認識は経験に基づくと言いつつ、認識は経験に先だつとか、経験のあれこれの認識ではないと言うのは、人間の認識能力（直観とか悟性とか理性とか判断力）をアприオリに正しく考えていくのでないと、正しい認識に到達しえないということを言うためにこう言ったのです。経験的認識には風説や迷信も含まれます。これを除去するためには、科学論をきちんと確立していくのでなければなりません。このことのために。

「経験からの独立性」の意味について。人間は経験の中で刺激を受けて認識しますが、この認識をどれだけ人間の認識能力（直観とか悟性とか理性とか判断力）において頑張っても、誤謬や先入見の混入は避けられません。真理の基準を経験認識から離れて独立に示す必要があります。そこでカントは、「客観的妥当性」と「可能的経験」を真理の基準として示したのです。この基準によって、認識は客観的になり経験に基づくようになります。なぜなら、人間の認識能力は直観とか悟性とか理性とか判断力と言えども主観に属しますので、認識は人間の主観的構成に留まり、主観性は免れないのですが（主観的観念論）、しかしこの基準に照らすことにおいて、経験認識が、経験的に可能で客観的妥当性を持つ総合判断として成立することが可能となるからです。「経験からの独立性」とはこういう意味なのです

それゆえ「アприオリ」という語は、上で見たように、認識は人間の認識能力においてなされるということを言うために使われた語ですが、同時にその認識は、客観的妥当性と可能的経験を基準に持つことにおいて真理となる（総合判断として可能となる）ということを行うために使われた語でもあるのです。

ところで、アприオリの語は今日では死語になっていて、哲学史的にしか使われなくなっています。しかしそれは当然です。客観的妥当性と可能的経験は、科学と誤謬を区別する大事な指針として確立されている現代においては、改めてアприオリから説明する必要はないからです。「人間的に考えれば」と言えばすみます。しかしこの語は、「人間認識」の可能なることを高らかに宣言した語なのです。つまり科学論を確立した語なのです。哲学史において忘れてならない歴史的用語とはっきり申し上げておきます。

この後、氏は、超越論的哲学や統覚（自己意識）、現象界と叡知界、物自体について述べていきます。しかし私には羅列的に読め、氏が何を意図して書いているのか、その真意は分かりません。しかし私への批評は書かれていないので、問題にしないで進むことにします。

#### <純粋理性批判>の項②

氏は、超越論的哲学と弁証論の関係を述べる中で、「久田氏のこの一文については納得しません」と言います。しかしその一文は示されていないので、氏の主張を類推して応えることにします。多分、カントの弁証論には生成の視点はないのに、久田氏はヘーゲルの弁証法ばかりに生成の視点を入れて理解しているということのようです。

カントの弁証論は、カントの科学論との関係で極めて重要な論です。

人間理性は科学（自然認識）を発展さようとして、悟性を無視して、経験を越えた勝手な理解を悟性に押しつけようとすることがあります。それは間違いです。経験を越えてしまい、科学を科学でなくさしてしまうので。理性のやるべきことは悟性に己の目標を提示して働かせるのでなければなりません。これがカントの弁証論の主張です。極めて重要な主張と思います。

科学認識を発展させるには超越論的に考えることが必要ですが、超越的に考えてしまって、経験的に可能でないものをデッチ上げてはいけません。これがカントの科学論なのです。

確かにここには生成の視点はありません。生成を語る場所でないから語らなかつたのだと思います。しかしカントは科学（自然認識）の発展、深化を問題にしています。カントの認識論図を見れば明らかです。私はこのことを *begreifen* と *wirklich machen* で説明したつもりでしたが、不十分であったかもしれません。しかしカントには生成の視点のあるのは自明です。

私は私の本の中で、ヘーゲルにもマルクスにもそして西田幾多郎にも科学論はないと明言しておきました。カントの科学論は完璧であるので、これを前提しているために。それゆえ私は、カントの弁証論は述べたけれど、ヘーゲルの弁証法については述べなかつたのでした。述べる必要はないので述べなかつたのです。

折角ですので、カントの弁証論とヘーゲルの弁証法についての私の理解をここで述べておきます。カントの弁証論は科学を科学でなくさせる超越を戒めたのです。ヘーゲルの弁証法は認識の陶冶の相を示したのです。両論に共通項はありません。比較できない問題を比較するのはよくないと思います。

カントの生成論については、〈判断力批判〉の個所で再論します。カントは、規定的判断力と反省的判断力の問題として深めていきます。

この後、氏は、アンチノミー（二律背反）について述べていきます。

### 〈純粹理性批判〉の項③

氏のアンチノミーの理解は概ね正しいと思います。ただ私は、カントのアンチノミーについての説明は十分に理解できていませんので、まず、氏の私への批評に対して十全な反論は書けないと申し述べておきます。

氏の批評は、私の「カントのアンチノミーは解決不能の問題として提出されたのではなく、悟性と理性の正しい融合によって解決されるべき問題として」提起されているという理解に対してでした。氏は「感想は複雑」と言いつつ、「融合」の理解は間違いと言います。

後者の批評については、私は間違っていないと明瞭に反論しておきます。

カントは悟性認識と理性認識を峻別していますが、同時にその上で、理性による悟性認識の正しい使用法を問題にしています。弁証論において、これが私の反論の根拠です。カントは峻別で終わりではないのです。

### <実践理性批判>の項①

冒頭で氏は、この本で、私が『人倫の形而上学の基礎づけ』を扱っていないことと、「人間は自然を bestimmen し、それを wirklich machen して、自然を Wirklichkeit の世界にして生きている」と表現したことを批評します。

最初の批評について。

この本の執筆時には、まだ読んでいなかったからと応えておきます。今はこの本を読んでいますので、感想を以下に記します。「倫理学は、道徳を人倫として（社会に）実現する学である」と言っているのを知り、大いに得心したと付け加えておきます。

2番目の批評について。私のこの表現、つまり「人間は……自然を Wirklichkeit の世界にして生きている」をとらえて、氏は、私が「ヘーゲル的な理念の実現（具体化）」と解していますが、それは「違う」と反論しておきます。

しかし私の表現が、なぜ「ヘーゲル的な理念の実現（具体化）」になるのかの説明がないので、私にはこの批評の意味はよく分かりません。だから、私の反論はずれたものになるかもしれません。

私は『実践理性批判』は、『純粹理性批判』の成果の上で書かれていると理解しますが、氏のこの点の理解は曖昧のように思えます。そうでなければ、こんな突拍子もない「ヘーゲル的な理念の実現（具体化）」などという批評は出て来ないと思います。

氏は、「自由は道徳法則の存在根拠であり、道徳法則は自由の認識根拠である」を引用して、この実践理性の「自由」こそは、道徳世界における何者からも制約を受けない意志決定の自由であって、「超越論的自由」でなければならないと言います。

しかしこの「超越論的自由」は、可能的経験としての認識論の制約を受ける自由なのです。カントは実践的自由を「超越論的自由」と言っても「超越的自由」とは言わないのはこのためです。上の「曖昧論」はこのことと関係しているように思えます。

道徳が勝手理解や妄想であってははいけません。「制約を受けない自由」とは、善意志に則って自由に自然科学の知識を駆使して、人間にふさわしい道徳の人倫社会を築いていく上での自由であって、この道徳的自由が、妄想に転落していく超越的自由であるわけがありません。

この後、氏は仮言的命法と定言的命法について述べていきますが、カントは批判哲学の「分ける」という精神において両者を峻別したと言います。そして氏は、この峻別論に留まり続けます。

### <実践理性批判>の項②

仮言的命法と定言的命法について。氏は、上の「峻別論」において、私が「カントは仮言的命法を定言的命法に一致させる道を探ろうとしていた」という言をとらえて、「間違いと思う」と批評します。しかし同時に氏は、人格としての意志は「己の行為を道徳原理（法則）に包摂させ、これを基にして主観的意志として善を実践していく」という私の言を同感と言って評価します。

矛盾した評価（叙述）になっています。私は前の文を具体化するために後の文を書いたのですから、この矛盾的评价には驚きを禁じ得ません。

氏は私の後の文を読み違えているのかもしれませんが。私は「己の行為」を、自然的な道徳的行為としての仮言的命法による行為と理解して、上のように叙述したのです。

さて、私がこの上のように叙述した理由を以下に書きます。

カントは人間にとって自己愛に基づく幸福の追求は固有のもの（傾向性）と言っています。これが自然道徳です。しかし固有の幸福をそれぞれが勝手に追求したら闘争になってしまいます。みんなで幸せになれる方法でやっつけていかないと。これが道徳論としての定言的命法の提起となった理由と私は考えます。以上です。

この後、氏は、実践理性の3つの要請に論を進めていきます。

#### <実践理性批判>の項③

氏は私の3つの要請理解は正しいと言います。そうならば、上での道徳的「峻別論」はどうなるのかと言いたくなります。しかしそれはそうとして、氏の意見を聞くことにしましょう。

自由の要請は感性界にありながら叡知界に生きようとする人間の本性から出て来るとする久田氏の理解は正しい。

魂の不死性の要請は道徳法則を充足するに必要な無限進行から出て来るとする久田氏の理解は正しい。

神の現存在の要請は人間の善行を最高善にしていくために出て来るとする久田氏の理解は正しい。

こうであれば、氏の峻別論に基づく私への批評は、的外れになりませんか。カントには生成論（私の叙述では陶冶論）はないとの批評でしたが、間違いとなりませんか。カントは、魂の不死性の要請も神の現存在の要請もともに、道徳を陶冶し深めていくために要請されると言っているのですから。仮言的命法を克服して定言的命法に至る陶冶のために。

#### <判断力批判>の項①

規定的判断力と反省的判断力について。規定的判断力は *bestimmen* に対応し、反省的判断力は *wirklich machen* に対応しますので、私は既に論述したものとして、この場面での叙述では取り上げませんでした。氏の指摘によって、この問題でカントが「包摂」問題を問題にしていることが分かったので、反論としてでなく、カント・ヘーゲルの結節を示すものとして述べさせていただきます。

規定的判断力は、特殊的なものを普遍的なものへ包摂することにおいて法則として活用する判断力であり、それに対して反省的判断力は、特殊なものの中から、つまり特殊なものに「包摂」される中で、普遍的法則を見いだしていく判断力とカントは言います。

氏はこの反省的判断力のことを、カントは「人間の魂の深みに隠された技術」と言っていると紹介します。素晴らしい引用です。しかし氏にとってはまことに皮肉なことですが、ここでこそカントは、認識の生成そして発展を問題にしているのです。この特殊なものの中からより高い普遍性としての法則を見い出していくと言うのですから。私はこの部分の紹介を、もう少し丁寧にしてあげればよかったと反省します。

この後、氏は、カントの自然の合目的性とか人格、自律、快不快、自然美、自然諸目的等の語を紹介していきますが、羅列的な説明に留まり、なぜカントがこういう叙述をしたのかについての言及はありません。私にはこの部分は、カントが自然認識を人間が深めていく相を、道徳法則に則って、自然法則を *wirklich machen* の立場から再思考しているよう

に思えたので、そのように叙述しておきました。残念ながら、氏からはこの点についてのコメントはありません。しかし別の個所で、「三批判書を総合的に考察する久田氏の視座を支持」とか、「理性重視の久田氏の＜構想力および『判断力批判』重視＞に同感」と言ってくれていますが、本当にそう思っているのかなという疑念が残ります。

さて、余談として。余談とは渡邊氏が批評していないことを書くという意味での余談です。ヘーゲルの初期著作、講義要綱として書かれた『人倫の体系』（『人倫の仕組』）と、このカントの規定的判断力と反省的的判断力の関係について述べておきます。「カント・ヘーゲルの結節」を示す相が見えてきますので。

ヘーゲルはこの著作において、判断力を、主観（人間）による客観認識の関係としてとらえ、主観を直観、客観を概念とし、規定的判断力を直観が概念を包摂する判断力、反省的判断力を直観が概念に包摂される判断力として論じ、直観（人間）は概念（客観）に包摂されながら包摂して認識を深めていくと説いています。

私は、ヘーゲルのこの著は、ヘーゲルのカント哲学受容の書と考えます。直観と概念の相互包摂において人間は己の認識を豊かに陶冶していく相を叙述しているのですから。後にヘーゲルは精神の哲学と言われるようになりますが、その精神の中味はこの人間の自己陶冶を指していることは自明です。ここにこそ「カント・ヘーゲルの結節」があると私は思います。

私を批判する論者は、渡邊氏に限らず、是非ヘーゲルのこの書（『人倫の体系』）を読んで欲しいと思います。認識が一変するはずです。

#### <おわりに>の項

氏の文にはこの項目はありませんが、中味から考えるとこうなりますので、こうしました。氏は、「久田氏のヘーゲル的立場からの解釈によるカント哲学用語の曲解」という強い言い方で私を再批評します。

氏は、カントの認識は人間悟性による認識で、現象界の認識、だから物自体の認識でも、叡知界（神）の認識でもないと言いますが、それはあたり前のことです。カントは人間の認識を科学として確立することを問題にしたのですから。私はこのことを了承した上でカント論を展開しています。なぜこれが「ヘーゲル的立場」になるのでしょうか。この批評は当たらないと思います。

次の批評は、私が、「感性的直観」を不用意に、意図を伴う直観だから「知的直観」とした点についての批評です。不用意でした。カントの時代の「知的直観」は叡知界（神）の「直観」のことでした。反省します。しかしカントの「感性的直観」は陶冶する直観なのです。このことははっきり述べておきます。

更に氏は、私が定言的命法と仮言的命法との関連で、人間は「自己愛を理性的あり方に高め」、「自己愛を大切にしつつ、これを理性的な自己愛へと陶冶していく」と述べた点を、カント哲学には生成（陶冶）の思想はないと再批評します。これに対する反論は、既に<実践理性批判>の項②でしておきましたので、繰り返しません。

逆に質問したい。氏は、カントは自己愛の理性的自己愛への陶冶を否定していると言いますが、では、カントは自己愛をどうしろと言っているのかが聴きたい。カントは自己愛への傾向性は避けられないと言っています。道徳法則に従って抑圧せよと言っているのか。それとも道徳法則の則って自己愛を理性的自己愛に陶冶させようと言っているの

か。それとも第三の道を説いているのか。私は真ん中だと思っています。

#### <むすび>の項

氏は、高坂正顕とハイデガーのカント論を紹介して、カント哲学を、「人間の有限性」に基づき「人間存在の有限性」を強調していると語らせます。この有限性論は当たり前のことです。私が主張するのはカントは有限性のみを語ったのではないということなのです。カントはその有限性の中で陶冶する人間（人格）を問題にしたのです。この理解を、氏は、ヘーゲル哲学の「理念の哲学」からの解釈と言って論難します。そして氏は、この理解において、私がカント哲学に「生成」（私の語では「陶冶」）の思想を見るのは誤りと改めて断定します。

氏のこの断定に対する反論は、上で述べた通りです。氏には何回もこの私の反論を読み直してほしいと思います。カント哲学に陶冶の思想を見るのは容易のはずです。

最後に、私はこの『ドイツ観念論物語』を、カント哲学の上にヘーゲル哲学は開花したというテーマで書いたと伝えておきます。

#### [追記] ①

私はこれを機会に自分の本を読み返してみました。統覚について言及がないなど、ずいぶん稚拙な書になっていることが分かりました。氏の批判が古色であるのは、この私の稚拙さと関係があるのかもしれませんが。先輩である私に稚拙とは言えないために、古色なカント派によるヘーゲル批判論に頼って、こんな批判論を書いたと思えなくもないからです。稚拙なら稚拙とはっきり言うべきです。まともな批判がしてほしかった。

#### [追記] ②

突然に重松知男氏から、『久田健吉著<ドイツ観念論物語>』というテーマの批評文が送られてきました。多くの問題を抽出して質問と批判をしてくれています。感謝申し上げます。

しかし、これらの質問と批評に対するお応えは感想程度になることをお許し願いたい。

- ・二律背反について。私の一番弱い所であるので、勉強しなおします。
- ・コペルニクス的転回について。こういう認識だからカントは主観主義を克服できなかったと言うが、客観的妥当性や可能的経験をカントは真理の基準にしている。主観主義を克服していると思うが、どうだろうか。
- ・可能的経験の意味は、経験において可能となるという意味である。

仏教哲学とカント哲学との関係についても多くの疑問をいただきました。お応えしたいのがやまやまですが、大部になりますので、別の機会にお応えすると答えておきます。仏教が日本道徳をつくってきたという梅原猛の主張と軌を一にする私にとって、いい論客が現れたものと感謝しています。